

岡崎ホスピスケアを考える会通信

2号

平成11年12月17日

◆10月の例会報告

- テーマ = ビデオ視聴・手縫い
日時 = 10月15日(金) 10時 ~ 12時
場所 = 岡崎勤労福祉会館
参加数 = 会員14名・その他1名
内容 = ・ビデオ視聴「死を見つめる」アルフォンス・デーケン上智大学教授
死への準備教育から死の哲学までエピソードをまじえながらでしたがちょっと難解でした。
・手縫い → 雑巾を手縫いしました。市民病院、愛知病院に届けます。

◆11月の例会報告

- テーマ = 「江藤さんの決断」を読んで
日時 = 11月19日(金) 10時 ~ 12時
場所 = 岡崎勤労福祉会館
参加数 = 会員19名・その他2名
内容 = ・6-7人ずつ三つのグループに分かれ、自分の体験と江藤さんとを重ねながら、告知、
老い、孤独、形骸とは、病気、生きる価値、夫婦とは、友人とは、などについて話し
合いました。(話し合いの報告は別途記載)
・結論は自分自身の中に出すことにし、最後に江藤さんに黙祷を捧げ終わりました。

◆報告

1. 10月29日(金) 県立愛知病院 沢柳看護部長との話し合い。
2. 11月 2日(火) 県立愛知病院 有吉院長と沢柳看護部長との話し合い。
3. 11月 8日(月) みかわ市民生協組合員交流会で発表。
4. 12月 2日(木) 県立愛知病院 安江副院長との話し合い。
5. 12月 7日(火) 岡崎市民病院 御園看護副婦長との話し合い。



◆お知らせ

1. 「ホスピスケアを考える会」のしおりができました。 何部か必要な人はご連絡ください。
2. 「緩和ケア相談窓口」開始
かねてから話し合われていた「緩和ケア相談窓口」を、県立愛知病院沢柳看護部長のところで受け付けてもらえることになりました。
電話番号は0564-21-6251です。時間は午後3時以降でお願いします。

◆ご案内

1. 参加者募集
12月22日(水) 午後6時半より県立愛知病院でのクリスマスコンサートに、医療スタッフと一緒に参加することになりました。練習日は12/20・12/22 時間は17:30~18:30
曲目は「赤とんぼ」「埴生の宿」「いつくしみ深き」「聖夜」など知ってる曲ばかりです。
2. ボランティア募集 (受付案内・車椅子を押したりなど)
9:00~11:30まで、一週間に一回でも一ヶ月に一回でもいいそうです。
連絡先→岡崎市ボランティアルーム 0564-21-5377 希望者は連絡して下さい。
3. 1月の例会 1月21日(金) 10時~12時 (内容・場所は後日連絡)



◆概要 平成11年11月現在の会員数45人・定例会は第3金曜日10時~12時(変更もあり)

テーマ「江藤さんの決断」を読んだのグループ報告 平成 11 年 11 月 15 日

グループ I

- ・ 二人だけの世界をつくらず、一人一人自立していくためには、支えてくれる友が必要であり、元気である今、家族のためだけではなくその友のためにも生きていくことが大切ではないか。
- ・ 「形骸にすぎず」と軽い脳梗塞ごときで、言われているが、日頃江藤さんは、身体障害者の寝たきりの方達のことを、どう思っているのかわかる。(形骸ではない)
- ・ 16 年間寝たきりでありながら手鏡で周囲を映し、自然を楽しみながら暮らしている方も知っている。(生きているだけで価値があるはず)
- ・ 結婚後夫を亡くしたが、生きて子供を育てるのに精一杯自分のことを考える暇などなく、友人と健康に支えられて今日まで来た。
- ・ 子供がいないため、老後を子供に看てもらうこともできないし、江藤さんの気持ちがよくわかる。しかし、死ぬ勇気もない。
- ・ オギャーと生まれた時にもう、人の世話になるし、世話をする方も喜びである。生きていくということは互いに世話になりあい、迷惑をかけあうことなのではないだろうか。(でも、してもらうことは、つらい)
- ・ なぜ、つらいのだろう——プライドがある。捨てきれない。理解されない。
- ・ 学歴・地位・名誉・財産と、生きる力があるかどうか、とは別のものなのだと考えさせられた。

グループ 2

- ・ いずれ必ず人は死ぬ、どういう死に方をしたいのか自分は子供には伝えている。
- ・ 病気になったとき、本心が言えるのでは、死を前にしてすべてをさらけ出せるようになるといい。
- ・ 自分は告知をしてほしいが夫はするなと言う。
- ・ 死が目の前によぎったとき、子供に遺言を書いた。
- ・ 元気なうちに残すものを残しておきたいから告知をしてほしい。しかし、支えてくれる人がいなければつらいのではないか。
- ・ 支えというのは少しづつ普段の生活の中でつくっていくものだ。
- ・ 精神的なケアは患者同士でもやっている。(乳ガンにかかった人達が年に 1 回集まって旅行をしている)
- ・ 江藤さんは奥さんにいつわりを言って見送った後、自分を支えるものがなかったのか。
- ・ 人に迷惑をかけずに死んだというが(江藤さん)それは無理。
- ・ 年をとっていく過程で年を受け入れていかねば。
- ・ 友人で子供のいないおばあさんへ毎日電話をかけて安否を気遣っている。同じように子供のいない自分の老後を気遣い「貴方が年をとった時はどうするの？」聞かれ「おばさんみたいな友達を作るからいいわ」と話した。

グループ 3

- ・ 自死の善し悪しではないが、神から与えられた命は、最後まで生きることだと思う。
- ・ 自分は今を感謝して生きていこうと思っている。
- ・ 自死する前は、精神的な病気の状態ではないだろうか。周囲に江藤さんに関わる人がもっと多くいたら気づいて支えられたのではないか。
- ・ 「生まれるときは意志はないけれど、死ぬときは自分の意志で死にたい」と延命治療は受けず、自宅での最期を望み、父親を看取り以来自分も死の準備を考え整理している。
- ・ 告知ということで・・・ある日病院からの電話が突然に家庭から日常を消してしまう。
検査の結果を自宅に電話し、妻に夫がガンであることを告げ、本人には事実を告げるかどうか今決めて欲しいと言われた。これだけのことを冷静に受け止められるのでしょうか。「本人には言わないで欲しい」とだけ返事をし、翌日、紹介状を貰い大きな病院へ行った。「即入院、24 時間点滴」となる。夫は「何の薬ですか？」と聞き、医師は「抗ガン剤です」・・・この間の胸にかかえてきた不安と緊張はこんな形でくずされ告知された。手術は成功し 1 ヶ月後退院。職場にも復帰し、ようやく日常が戻ってきた時、当たり前になっていた毎日が本当にありがたいなと思える。
- ・ 告知する側・される側も病気とどう向き合うか。そしてそれを支える周囲の人にも不安にならないよう、十分な説明と治療方針、退院後のケアを考えていけるようになるといいと思う。

